
ここが願いの終着点

水沢 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここが願いの終着点

【Nコード】

N6804Y

【作者名】

水沢 流

【あらすじ】

「異界に行ったら、理想の自分の姿になるのがセオリーじゃないの!？」

異世界に落ちた途端、なりたかった自分そっくりの「他人」と対面しちゃいました。

自信なし、学力なし、やる気なしの三拍子揃った主人公が「理想の自分」と繰り広げる異世界での物語。

シリアス&コメディごっちゃまぜ、メインはボケツツコミ多めです。

若干、ホラー要素あります（心霊ではなく、エイリアン系）。

死ねばいいのに

ドオン！ と派手な爆炎が上がった。

ブツ飛ばされるクリーチャーの群れ、こつぱみじんに砕け散る窓ガラス。

豪快に爆裂したビルの中から、銀月の夜空へと男のシルエットが跳ね上がる――

「イヤッハア！」

高らかに歓喜の声を上げて、片手にひっつかんだクリーチャーを地面へと叩き付ける男。

ザンツ、と着地したそいつの足元で、砂塵と化したビルの破片が散った。

「ただいま、セーコ」

にイとワイルドな笑みを浮かべた男がアタシに言う。

黒髪に赤い瞳。引き締まった体。

そいつに向けて、アタシも笑った。

たった一言――そりゃもう、最高の笑顔で、

「死ねばいいのに」

アタシは晴子。ごく普通の学生だ。

いや、学生だった。

それがちよつとした事でこの世界に来て、帰れなくなっちゃったりする。

特別な血筋だとか、世界をどうこうするために呼ばれたとか、別にそんなやつじゃない。

まあ、その話は後にするとして。

ここはゲルナム。アタシの住んでいた世界からすれば立派な異世界だ。

で、ここでアタシのパートナーと言うか、腐れ縁になった野郎が」。

最初に会った時は、どっかの俳優かとマジで思った。そう言う外見だ。

軽くメタル入った格好も、違和感無くキマってる。

黒いライダースーツに金具を絡め、襟元を大きくはだけさせた独特のスタイル。

アタシ達の世界なら、そう言うのが好きな奴に追いかけられそうな姿だ。

けど、アタシはどうにもコイツと相性が悪い。

「ちよっとは愛想良くしようぜー、レディ」

ずかずかと歩くアタシを、良く通るハスキーボイスが追いかけて来る。

振り返りざまにそのツラを睨んで、アタシは溜息をついた。

「ビルまるごと吹っ飛ばしといて良く言うわ。謝れ。とにかく謝れ」

「それもそうだな」

「わかればよし」

「悪かった」

シユタ、と片手を上げて」が詫びた先は、

「おいコラ待てや」

誰が爆心地に謝れと。

「……もういい、怒る気なくした」

ふう、とため息をついて遠くを眺め、聞こえて来るヘリの音に耳を傾ける。

あー、空が綺麗で目が痛いわ。この痛さは明らかに煙のせいだけだ。

「何でアンタなんかと、なあ……」

男嫌いで近所中に知れ渡ってたアタシが、よりにもよってコイツとだなんて。

別に男にトラウマがあるわけじゃないけど、乙女ちっくな事ばかり望まれてウンザリしたんだよね。うん。

「つれねエなア。あんまり怒ってる的可愛さに欠けンぜ？」

「そりゃあ悪かったっ！」

涼しげな顔でほざくJに、適当な瓦礫をブン投げる。

ぱし、とそれを片手で受け止めたJの、やったら余裕の顔と言ったら！

むかつく。マジむかつく。鼻血ぐらい出せよ、せめて。

フンと鼻を鳴らして背中を向け、アタシはまた歩き出した。

「ほんと、死ねばいいのに」

——殺しても死なないような奴だけどさ。

彼との縁は、アタシがこの世界に来た日から始まっている。

初めてこの世界に来た頃、アタシは色々な事に腹が立ってて、目の前に現れたクリーチャーに怯えるより前に、こんなふざけた死に方があるのかって頭に来た。

それだと思った。

どーせ死ぬんだ、全部くたばれ！

目の前のクリーチャーも、偉そうに建ってやがるビルも全部、ブツ壊れちまえばいい！

——そう思った瞬間、飛び出して来たJがそいつをやったのけた。ポップコーンみたいにクリーチャーが吹っ飛んだ。

ビルが、サクッとスライスされて崩れ落ちた。

ゲームでそう言う場面を見た事はあるけど、マジで見たのはそれが初めて。

良く出来たセットじゃねーのと思った途端、Jの破壊旋風が終わった。

」。ただの」。

ジャックとかジョーカーとか、みんな好き勝手に呼ぶ。早足で歩くアタシの後ろを、のんびりと着いて来る」。

アタシは先を歩きながら、せめて何かにつまづいてコケればいいのとか、そんな事を考えていた。

そうして壊れた道を迂回すれば、誰もいない公園へと出る。

ほどなくして、風を切るプロペラ音とエンジン音がけたたましく鼓膜を叩いた。

ふと落ちた影の下から、額に手をかざして上空の音源を見上げる

その一機、躯体に吠え猛る龍の模様が刻み込まれたヘリは、アタシ達の雇い主であり家主でもあるアデリアさんのものだ。

「早い迎えだな」

「そりゃあ、アタシが呼んだから——ってちょっと待て！」

制止間に合わず、すいっと持ち上げられるアタシの体。

次の瞬間には、体が浮いた。

いや飛んだ。アタシが飛んだ。

気付けば重力とは逆方向に、ぽーんと花火のように打ち上げられてました。

「ちょ、ジャーッ!？」

みるみる遠ざかる地上で、アタシを跳ばした張本人が笑ってる。

その爽やかスマイルを見下ろして、アタシはスウと息を吸い込んだ。

ここでアタシが唯一使える能力。というか変換機を介して使えるようになった能力。それが、

「ふっざけんなこの……」

いわゆる大声を破壊力にするって奴で、

「クソツタレがーッ!」

叫んだ途端、グワツと辺りの景色が大きく歪む。

直後、ビル1本分の十円ハゲを作られた街に、五百円ハゲぐらいのクレーターが爆誕した。

「大丈夫？ セーコちゃん」

「あ、ありがとうございます……アデリア、さん」

ゼーはーゼーはーゼーはー。

空中に紐なしバンジーされたアタシを拾ってくれたヘリの中で、息も絶え絶えに返事をする。

「……死ぬかと」

生きてますが。

一瞬、マジでお花畑見えたよと胸に手を当ててへたりこむ。

倍速再生されてそんな心音が指に伝わって、どれだけ自分がビビってたかを再認識。

それを落ち着けながら大きく息を吸って、アタシはアデリアさんに提案してみた。

「Jの奴、ここに置いて行きませんか？」

そう言った途端、ドン、と言う重い音と共にヘリが揺れる。Jだ。

「……アンタ、ヘリ必要なくね？」

ひょいと顔を出し、ヘリの上に着地しているJに声をかける。

と、くあ、とのんきにあくびをかましたJが、その表情のままアタシを見た。

「……眠くて」

「落ちてよろしい」

親指を下に向けたアタシに、Jが片手をヒラヒラと降る。

それを見届けて、アタシは窓から頭を引っ込めた。

ふと気付けば、アデリアさんが妙に微笑ましくアタシを眺めている。それに何となく気まずさを覚えて、アタシは外へと視線をそらした。

アデリアさんは、いわゆるラテン系のおねーさまだ。やや褐色がかった肌に彫りの深い顔立ち、黒の瞳、そして豹を思わせるしなやかさを備えたスレンダーな体つき。

見た目に劣らず、戦闘のプロフェッショナルでもあるおねーさま。そんな彼女の顔を映す窓を通して、アタシはぼんやりと空を眺めていた。

ゲシュペンスト

うーん、景色がいいっ！

マンションの最上階、青空間近、見晴らし抜群のスイート・ルームに到着するや否や、やばったい上着を放り投げて窓に駆け寄る。広々とした大きな窓から見る世界は、まるでドラマの一場面のよう。

そんな贅沢感溢れる部屋こそが、アデリアさんとアタシ達の住む場所だ。

…や、持ち主はアデリアさんですけどね。

スピーカーから流れるボサノバも、広々としたリビングも、何もかもがセンス良くまとまっている。

普通、こう言う部屋って成金趣味でケバくなるもんだけど、そうならねえのがアデリアさんらしさなんだろう。

「ねー、アデリアさん」

「何？」

「Jって……つまり、何？」

ひとしきり景色を堪能した後、カウンターに歩み寄って椅子に腰掛けるアタシに、キッチンに立っていたアデリアさんが振り返る。

先進文明——なんて言うともっとメタルちつくなイメージなんだけど、そう言われなければわからないぐらい、ここにはアタシの世界そっくりな日常があった。

良くわからんが、ここはそう言うエリアらしい。まだ他に行った事はないけれど、この世界ことゲルナムには、場所ごとに地方色みたいなものがあるそうだ。

ようするに町の雰囲気を大事にしましょう運動みたいなもので、アタシ達の住んだ町のような雰囲気を作る事が、この場所の売りであり特徴らしい。

「せっかくだし説明するわ。あ、セーコちゃん何か飲む？」

そうたずねてくれるアデリアさんに、こくりと小さくうなずいてみせる。

それから数分もしないうちに、アデリアさんが銀色のケトルの湯をティーポットに注いで、紅茶を一杯淹れてくれた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

シンプルな白いカップが、渋味の少ない紅茶のはちみつ色を引き立てている。

あ、いい香り。

「普通に湯で淹れるんですね…」

「そうじゃない方法も取れるけど、こっちの方が好きなのよ」

なんか落ち着くでしょ？　と言いながら流れるような動作で椅子に腰掛けたアデリアさんに、カップ片手にうなずいてみせる。

確かに、映画みたいにウィーンって機械でカップが降りてきても雰囲気出ないですもんね。

「セーコちゃん、音叉って知ってる？」

「音叉は…何となく。叩くと音が共鳴するってアレですよね」

いまいち自信ないけど。と、口ごもった最後の方をごまかすために紅茶を一口する。

それはどうやら正解だったみたいで、アデリアさんが笑顔でうなずいた。

「Jはね、ゲシュペンストなのよ」

げしゅ…？

唐突にアデリアさんから告げられた単語に、お勉強ニガテな脳内が一気にオーバーヒートする。

そんなアタシの表情を見てピンと来たのだろう、アデリアさんが「種族名みたいなものよ」と解説を入れてくれた。

「セーコちゃんみたいな人がね、時々、こっち側に流れて来るの。そうするとゲシュペンストが対で生まれ、Jみたいなができるってわけ」

そんな風に言うアデリアさんの口調は、ずいぶんと言葉を選んで
いるような調子だった。きつと、もつと複雑な仕組みがあるのを、
アタシに合わせて簡単に言い直してくれてるんだらう。

「で、セーコちゃんと」との関係は、その音叉に近いわ。共鳴者の
人が精神活動していないと留まる、共振の石」

「石…ねえ」

そこで雑誌読んでるあれが石コロですかい。

長身の体をソファに横たえて、頬杖付きながら堂々とまあ、余裕
なこつて。

「活動してないと停まるわりにゃ、アタシが寝てても動いてますけ
ど。あれ」

「一回共振すれば、当分動けるのよ」

「…はあ」

わかるよーな、わからんよーな。

とりあえずアタシが来たから」が生まれて、アタシが死ぬか何か
して精神活動が停止すると、」もいずれ消える。

ともかく、そう言う事らしかった。

と言うか、それぐらいしか理解できませんでした。はい。

「んで、アタシが来て」が生まれたとして」

「ええ」

「最初からあの格好で生まれて来るんですか？」

「違うわ。『原野』『深層』『集合意識』『混沌』『坩堝』…まあ、
私達ミューdiamによって呼び名は色々だけど。」はそこから私が
拾い出したの」

「……」

「世界が違えば、呼び出したとか召喚したって言うのかしらね。ゲ
シュペンストって最初実体がなくて、波長が合う形にしか固着しな
いのよ。ゲシュペンストの望む形をどこまで構築できるかが、私達
の腕の見せ所ね」

「…はあ」

つまり、気に入った器にしか入らない幽霊みたいなモンですね。こう、日本人形の髪質が気に入らないと宿らない呪い子さんとか。なんて贅沢な奴なんだ、と腹が立つてくる。アタシなんて、見た目選んで生まれて来れねえってのに。

「不公平だ」

ぼやき、相変わらず悠々と雑誌読んでる」をチラ見して、ふう、と大きく息を吐く。

そんなアタシの小声が聞こえたのか、アデリアさんがエキゾチックに微笑んだ。

「セーコちゃん、なりたかった自分ってある？」

「……ええ、まあ、一応は」

オンナオンナ言われるのが腹立ってたんで、自由奔放に生まれたかった。

それで、できれば女じゃなくて男が良かった。ちっさい背丈が嫌だったから、できれば高めの身長で、運動能力は抜群が良かったよ。

「……」

思わず、視線が」と合う。

いやいやちよつと待て、違う違う。何かが違う。違いますかアデリアさん。

慌ててぶんぶんと頭を振るアタシに、アデリアさんがくすくすと笑う。

「……ヤな予感がした。」

「まあ、あなたのなりたかった自分って事ね。とても簡単に言っと、そういう存在よ」

——はい？

思わずぽかーんとしたアタシの目の前で、にこにこアデリアさんが笑ってる。

ああ、何てまぶしい笑顔。

美女の笑顔って、こんなに破壊力のあるものなんだろうか。

その手の趣味はないけど、屈託なく笑うアデリアさんの前では何

も言えなくなる。

直後、ぶわつと頭に血がのぼった。マジで。

「……」

思わずまたJを見る。

あれがアタシの理想？　って言うか、アタシの理想ってあんなチヤラ男じゃねえし、だいたい今の言葉ってJに聞こえてんじやねえの。

むしろ最初から知ってたとか——そう考えると、こっちが落ち着かなくなってるんですが。

「……あの」

「なあに？」

ほがらかに聞き返して来るアデリアさんから視線をそらし、思わず下を向く。

それから、アタシは机の下で指を組んで、ぼそぼそと小声でつぶやいた。

「……それ、ずるくないですか」

いやだってホラ、異世界召喚ってのは普通あこがれの自分になれてバンザイー！とかそう言うのがセオリーつつかなんつつかですね。

そう思っている間にも恥ずかしさと腹立たしさとで顔面が熱くなってきた、反射的に椅子から立ち上がる。

「J、ちよつとベランダに出てくれる？」

「いいけど」

不思議そうな顔でベランダに移動したJに、つかつかと歩みよるアタシ。

そして――

「納得いかんわーっ！」

泣き笑いの激情をありつたけ込めた絶叫の砲撃で、アタシはJを大空に向けてかっぱした。

切片

「何か、こうして見ると異世界って感じがしないよな……」

マンションから出て、夕暮れ通りを歩きながら辺りを見渡してふと呟く。

見えるのは普通の公園。普通のブランコ。普通の街路樹。普通の家。

「……………」

このまま真っ直ぐ行ったら、見慣れた通学路に出るんじゃないかとさえ思えて来る。

それぐらい、ありふれた光景がそこにあった。

「実感わかねー」

先日、盛大にビルごと「J」にぶつ飛ばされた辺りが、もう何事も無かったかのように公園と化している。

そこに足を踏み入れ、ベンチに腰掛けてアタシはふらりと空を見上げた。

だんだんと暗くなって行く空もまた、見知った町そっくりだ。それを眺めながら、アタシはココに来た日の事を思い出していた。

最初は、本気で死ぬつもりだった。

別に死にたくなるほど嫌な事があったわけじゃない。

ただ何となく、面白いと思える物が減っていた。

テレビつけられくっだらな暗いニュースばかりで、天気は例年に無い何とかか何とかで。

その例年っていつよとツツコミ入れたって、どーせリポーターは答えちゃくれない。

不況がどーたらこーたらでお先真っ暗、恋愛記事は男女の妄想の吹き溜まり。

なんたら活動って何それ楽しいの、それでもって親はうるせえし

束縛するしでうんざりだった。

「ねー、セイ」

「…何」

不意に話しかけて来た幼馴染、純子の方へと顔を向ける。

彼女はバリバリのギャルだ。

純子って名前が気に入らないからジュンと呼ばせる。

周りにも、アタシにもだ。

そして、アタシの晴子もセイと呼ぶ。

アタシとは全然見た目も違う、趣味も違う。

なのに、何でかジュンとは付き合いが長くなった。

何でって言われると良くわからんけど。

「三丁目にさあ、怪の落書きってのがあって。それ見ると次の日異世界に行けるんだって」

「ふうん」

「こっちの肉体は死んじやうらしいけどね。ねえセイ、見に行こうよ。見たら最高じゃん？」

「ハア？」

思わず声が裏返った。

何言ってるの、ジュン。

お洒落して、ダチと騒いで。アタシよりずっと充実した人生送ってそうなのに、一体何なの。

やりかけのゲームのコントローラーを放り投げ、顔だけそっちに向けて眉をひそめる。

画面では今まさにイベントがクライマックスに突入する直前だったが、そんな事はどうでもよくなっていた。

「セイ、あのね」

膝の間、綺麗にデコった爪を揃えてジュンが笑う。

フリルスカートの花の中、宝石みたいにキラキラと爪が光ってた。

「何かさあ…飽きちゃったんだ」

「飽きたあ？」

「んー、先が無いって感じ？」

ジューンはあるまり、言葉選びが上手く無い。

「ちー子もサッチもガッコのみんなも嫌いじゃないけどさ。何だろ…付き合い続けて行こうと思ったら、興味無い話題でもとりあえず付き合わなきゃじゃん」

「まーね」

それが嫌だからアタシはネットを居場所にしてる。

めんどくさくなったら逃げられるし、三次元に王子様探すほど、自分をわきまえて無いわけじゃない。

それでも、それなりにネット内で付き合いはあつたし、ゲーム仲間で盛り上がりたりで、まあ退屈はしていなかった。

充実してるかって言われると、正直、微妙だったけど。

「ジューンらしくないなあ、どうしたんだよ」

「んー、だってやっぱリカレシ出来たら女の友情よりリカレシじゃん？何っーの…むなしってかさあ」

「…まあね」

ネットに広がるどの記事を見ても、現実には満足している大人なんていない。

大人っていいなー、なんて憧れるお子様時代はとくに終わってる。

判るのは、腐った現実に向かって阿呆みたいな世間体気にして、それでババアになって死ぬだけだ。

大人になったら判るとかほざいてる連中見ると、全っ然判りたくねえと思う。

無料ゲームも世にあふれてるけど、一周しちまえばそれでおしまい。

新作新作って騒いでも、どれも似たり寄ったりだ。

「いいよ」

だから、その噂に対してOKしてみた。

良くある話だ。あの世と繋がっている門とか、死んだら実は異世

界に行くとか言う系統。

半分信じて、半分信じちゃいなかった——けど、今本当にここに
いる。

ジュンがどうなったかは知らないけど、少なくともアタシは『異
世界』にいた。

最初は自分を疑った。

実は事故に遭って、アタシはどこかの病院で寝てて。

これは、そんなアタシが見ている夢なんじゃないかって。

でも、疑っても疑っても夢が終わる事はなくて、結局、考えるの
がめんどくさくなった。

いつか醒めるなら、醒めるまで勝手に続けばいい。

……そう思ったら、ちよつとだけ気がラクになった。

「こつちでも、空は同じなんだな……」

背凭れによりかかり、そんな事をばやいてしていると、ふと、後ろか
ら影がさす。

くるりと振り返ると、そこに「」がいた。

「よう、セーコ。腰痛か？」

「……殴るよ」

人が感傷に浸ってる時に空気読めよ。

と言うか、それ以前の問題にだな。

「なあ」

「うん？」

「アタシに用事ある時は寄り道しないで真っ直ぐ来いって言ったよ
な」

「ああ」

涼しげな顔でうなずき、背後のしげみを指差す」。

そこに、ぱつかりと切り開かれたしげみがあった。

公園の外からここまで——ただまっすぐ一直線に。

「大型トレーラーかアンタはっ！」

誰が道路からしげみブチ抜いてまっすぐ来いに行った！

ぜえはあと声を荒げ、深々と息を吐く。

「いくら戻るって言っても、アタシ、そのしげみに同情するわ……」
ほんと、ひどい姿になっちゃって。

猫にむしむしされた後のカーペットみたいじゃないの。

「それで何、また仕事？」

「ご名答。どーせヒマだろ、付き合えや」

「……」

「どした？」

「……なあ」

「おう」

「アタシをのんびり寝させろやあ！ このアホンダラっ！」

昨日今日で仕事に駆り出すな、二度寝させろ！

そんな、仕事まみれのサラリーマンみてえな事を叫ぶアタシの声
が、むなしく夕暮れに溶けて行った。

出撃

「アタシ、アデリアさんいなかったらお前のお供なんか絶対やんねー」

お仕事、もといクリーチャー狩りの支度を着々と進める二人を見ながら、もそもそとケーキを齧る。

ささくれた気分を落ち着かせてくれるキャラメルケーキがやけに美味かった。

アデリアさん……お菓子作りの腕まで反則的だわ。

なんて思ってたなら、

「ライサもいっしょに行くー」

ふわっふわの金髪にドレスを着た少女が、ひよっこりと顔を出した。

ライサ。

こう見えても立派な兵器で、廃棄寸前だった所をアデリアさんが拾って来たらしい。

姿はアデリアさんの趣味だと言う。ぱつと見た感じ、お人形さんみたいな姿だ。

白いフリルのついた薄桃色の服は綺麗にギャザーが寄せられ、小柄な体をひときわ愛らしく見せてくれる。

アデリアさん……大人びているんだか、乙女ちっくなんだかわからない人だと言う時に思う。

「ライサは留守番でしょ？」

だめよ、とライサをさとすアデリアさんから隠れるようにして、ふわりとライサがアタシの後ろに隠れる。

「やー。せいこといっしょに行きたい」

ちっちゃな手をぎゅっと握って、目をうるませるライサのかわいい事！

思わずきゅんとなって抱きしめかけたアタシの前で、ライサが言

葉を続けた。

「Jもだいすきなもの」

……おい？

何か今、聞き捨てならん事を聞きましたが。

「オーケイ、ライサ。後で俺が遊んでやるよ」

おいおいおいおい。

何でお前がそこで流し目使った、J。

「何だセーコ、嫉妬か？」

——っ！

「誰が嫉妬しとるかボケえ！」

そのおめでたい思考回路を今すぐ水で洗いなおして来い！

近場にあった空容器をブン投げて、アタシは息を荒げた。

「この、阿呆。ほんっと、死ねばいいのに」

生身の人間ごときが、殺せる相手じゃないと理解はしてるけど。

いつか泣かせてやると、アタシは内心で拳を握りかためていた。

「用意はいい？ セーコちゃん」

「はい」

高台の上、仁王立ちになったアタシが硬い声で応じる。

仕事で入った先——ゴーグルを通して見る世界は、肉眼で見るそれとは随分と違った。

無機質な荒野に、奇妙な建物がまばらに立つ世界。そこにはひん曲がった植物のようなものや、謎のモノリスのようなものまで見える。

アデリアさんいわくナイダス。つまり、クリーチャーを生み出しているこの場所の本当の姿だそう。

ゴーグルを取れば、沿岸に美しい海を青く寝かせた、真っ白い建物が並ぶ地中海風の情景にも見えるのに。

その素顔がこんな異様なものだと思うと何だか切なくなってくる。ちなみに、敵が来たら真っ先に見つかりそうな場所にアタシが立っているのにはワケがある。

アタシみたいな「来訪者」は彼らから見えにくいらしいのだ。

やがて視界に次々と入り始める光点で、クリーチャーの位置を確認するアタシに声がかかる。

「セーコ」

「何？」

「マガジンの次の発売日、明後日だよな？」

「……」

この、バカ……っ。

「黙って仕事しろやあ、このストコドッコイ！」

怒りの声を爆発させるアタシの耳元、イヤホンからJの余裕の笑い声が聞こえた。

J達の位置と、敵の位置。

アタシにはそれらが光点に見える。

このセンサーを使ってクリアにそれらを判別できるかどうかは本人の素質による——と言うと聞こえがいいけど、メガネの度が合うようなもの、とアデリアさんは言っていました。

……確かにド近眼だけどさ。

こんな場所でもメガネと相性いいなんて超泣けるんですけど。

「セーコちゃん、見える？」

ひっそりと落ち込んだアタシの意識を、アデリアさんの声が呼び戻す。

それに応じて、アタシは視界に意識を集中した。

「見えます……一、五、二十、百オーバー……アデリアさん、来ます！ 気をつけて！」

叫ぶアタシの声が終わらない内に、ぶわっ！ と映る光点が一気に倍増した。

その群れが突き進む先にはJ達がいる。

ケタ外れの再生能力を持つているJは別として、アデリアさん達に傷を負わせるワケには行かない。

「ライサも！ 来るよっ！」

叫び、アタシは「視る」事に全てを集中した。

ゲーマー甘くみんなっ！ だてに弾幕シューティングやってねえ！ 乱舞する光点の中、アデリアさんやライサを自機に見立て、衝突を避けるルートを視線だけで辿る。

すぐさまアタシの眼球の動きがデータ化され、アデリアさん達へと飛んだ。

それを頼りに二人が群れる光を潜り抜け、安全なポイントまで抜けたのを確認して叫ぶ。

「アデリアさん！」

「了解！」

「ライサ！」

「はいっ！」

勢いのある返事二つを追うように、消え去り始める光点の群れ。

それは、アデリアさん達が敵の撃墜を開始した事を示すものだった。

ナイダス

「セーコちゃん、後は大丈夫！」

ミラーシェイドから聞こえるアデリアさんの声を拾って、パネルスイッチを切り替える。

途端に視界の端のほうに光点マップが縮んで、すっと鮮やかな景色が目の前に広がった。

アデリアさんの目で物を見て、アデリアさんの動きを感じる疑似体験。

もつともアタシがアデリアさんを動かす事はできないし、本当に重なっているわけじゃない。

アデリアさんの視覚触覚を拾ったナノマシンの信号を、アタシのゴーグルもといミラーシェイドが受信して、脳にそう見せているだけ。

強制的な白昼夢、人工幻覚と呼んだほうが近いんだろう。この場合。

もちろん、画面の前もとい高台の上にはアタシがいる。体だってある。

重なっているのは感覚だけだ。

「……」

間近で見るクリーチャーは、案の定、お世辞にも綺麗とは言えない姿だった。

いわゆるモンスターと呼べる、鳥獣っぽい姿。

時に機械と肉体が混ざったその姿は、人によつては見るだけで卒倒しそうな外見だ。けど、アデリアさんは平然としたもので、その手の映像に慣れたアタシもまた平気だった。

『さあ、いらつしやいな！ 悪戯っ子！』

色気のある声を放ったアデリアさんの視野に、迫り来るクリーチャーが映り込む。

刹那、タン！ とアデリアさんの細い足が地を蹴った。

高々と跳躍したその体を追って、下方からバネ仕掛けのように次々と跳ね上がって来るクリーチャー。

それを見下ろして笑い、両手に持った拳銃を振り上げる――

『おやすみ！』

高らかにそう叫び、下方へと銃口を向ける。

そこから続く連射の雨を浴びて、一瞬でクリーチャーが四散した。ざまあ。

即座に右へと視野を流す。と、勢い良く滑空して突っ込んで来るクリーチャーが見えた。

だけど甘い！ この腕、この指による反応の準備はすでにできている！

『せっかちな？』

甘く囁き、クルリと回した銃の照準を合わせて即座に一撃。

それに撃ち抜かれて軌道を狂わせたクリーチャーを足場に定め、その頭を踏み蹴ってアデリアさんが跳んだ。

直後、ちらりとアタシの体がある方に目配せしたけれど、アデリアさんの視点からアタシは見えない。

だからいったん意識を自分の体に戻して、周囲を確認してからまたアデリアさんと接続した。

（平気、アタシの方に敵は来てません）

『わかったわ』

短い応答。

浮遊感に包まれたアデリアさんの体が、放物線を描くように空中を舞い、軽やかに近くの屋根へと着地する。

何条もの光を纏うアデリアさんのバトルスーツは、こう言う時、四肢の動きをサポートしてくれるスグレモノだ。

アタシは…うん。

一度着てみて、自分とアデリアさんのスタイルの差にショックを受けて以来丁重にお断りしてますが何か。

『だめよ、ボウヤ。あせるなんてみつともないわ!』

楽しげに笑い、突っ込んできたクリーチャーに再度銃弾を浴びせるアデリアさん。

次々とフォーカスをシフトさせては即効で撃ち抜いて行く様子は、重なってるコツチまでスカツとする。

あつは、喧嘩売る相手を考えろってんだ!

『J達は?』

(平気です)

むしろ失敗するって状況が考えられませんかよアデリアさん、ライサはともかくJだけは。

そう思って小さく溜息をつき、アデリアさんから意識を離す。

そして体に戻ってスイッチを切り替え、アタシは二人の確認に回る事にした。

ライサの方は順調だった。

普段の甘々を見てると兵器らしさなんてどこにも無いが、やっぱり場に出ると雰囲気が違う。

ふわ、と柔らかく後ろに下がったライサの前方に展開されるのは、回転を繰り返す巨大な金属のリング。

ガシャガシャツ、と硬質な音を立てて、リングから突き出した銃口が一斉にクリーチャーを照準に捉えた。

『目標、確認しました』

そう表情もなく、無機質な声で言うライサの両目は、彼女が保有するバトルプログラムの起動を示すディープグリーン。

普段の淡桃に近い色と違って、その眼球の表面には幾つもの数字やラインが映っている。

アタシはライサには重なれなかったけど、その変化はミラーシェイドのズーム機能のおかげで良く見えた。

『迎撃します』

スカートを両手で摘み、片足を引いたライサが優雅な礼を見せた瞬間、何本ものレーザーがクリーチャー達へと襲い掛かった。

蜂の巣と呼ぶに相応しいダメージを食らったクリーチャー達が、断末魔の絶叫を上げながら蒸発して行く。

それを冷たいまなざしで見届けたライサが、すつと片手を上に上げる――

直後にリングだったものがザラリと形を変え、彼女の手の上に巨大な砲台を作り上げた。

無骨な直方体のフォルムを持つ砲台の周囲で、輝きつなり出す無数の雷光――

『フェイズ2、カウント・ダウン。5、4、3、2……』

あ、クリーチャー終わったな。見る間でもなくそう思う。

エネルギーの大きさを正確に把握する事はできなくても、そこから生み出される砲撃がどれだけ爆発的な威力を秘めているかは想像に難くない。

『1――』

ライサのカウントがゼロを告げた時――

急いで反らした視野の端に、目もくらむような光が焼きついた。

一方、Jは。

ええまあ、予想はしてましたよ。してましたとも。

でも、

「アイツ、絶対器用な真似とか無理だよなあ」

こめかみを押さえてつぶやくと、自然と苦笑が唇に浮かんた。

なにしろ一面、見事な更地になっていたワケでして。

ええ。来た時は建物があったのに、今はなーんにもなくなってるわけですよ。

せいぜい、瓦礫の砂利が誕生したぐらい。

「ま、見晴らしはいいけどさ」

「Jが手にしてるのは、いわゆるハルバードに似た武器だ。

全長2メートル強、鉄色をした金属製で、長い柄の先に三日月型の斧と槍、小さな鎌と銃口がついている。

斬って良し殴って良し刺して良し、さらに撃って良しのスグレモノ。

それを振り回すJの周辺は、身を隠す場所もないほどの平面になっている。

どれだけ彼が暴れまわったか、それだけでも一目瞭然だった。

「…と？」

戦っていると言うより、クリーチャーで遊んでいるようにしか見え無いJの足元辺りに、ゆらりと陽炎じみた揺らぎが生じる。

それを認め、アタシは急いで声を荒げた。

「ライサ！ アデリアさん！ 出ました！」

『近い！？』

「かなり！」

ここです！ と口頭で説明するより早いとばかり、今見たばかりの景色を二人に転送する。

途端に、物凄い反応速度で二人がその場所から離れて行った。

おっし、アタシちゃんとオペレーターやれてるな。

なんて自画自賛しつつ、アタシも少しだけ後ろに下がる。

ずるり…と。

陽炎が見えたその場所から、巨大な何かが這い出ようとしていた。

「マザー…」

母と言う意を持つ、ナイダスの生みの親。

どう言う理由でコレが来るのかは知らないけれど、コレが来たらその土地はもうダメなんだそうだ。

こんなにも文明が発達した場所でも、どうにもならない事ってるらしい。

そう思つと、ずきん、と胸が痛んだ。

「……」

家からも出ず、ましてや生まれ故郷から離れた事も無かつたアタシには、住み慣れた場所を離れるつて考えるだけで怖い。

けど、そんなアタシの感傷をよそに、Ｊの方は逆に殺る気がチャージされたみたいだった。

不適に笑いながら、地から這い出して来るマザーを腕組みしながら眺めている。

その目の前でマザーの異様に膨れた腕が現れ、牙だらけの饅頭みたいな顔が現れ、続いて胴体が現れ――

Ｊを見下ろす巨大な顔の中心にコォ……と光が集まり始めた辺りで、ようやくＪが動いた。

武器を構え、一直線に駆け込んで行く。

直後、カツ！とマザーの顔面から光が爆ぜた。

マザーの撃ち出した光条が、地を削り飛ばしながらＪ目掛けて突き進む。

その瞬間、不意にＪが笑った気がした。

構えていたハルバードを袈裟懸けに振るい、その一閃で光条を裂く。

かと思えば二本に割れた光の合間に体を滑り込ませ、マザーとの距離を一気に詰めた。

『くたばれ！』

吠えたＪが武器を腰横に構え、一気に繰り出してマザーの頭部へと先を突き刺す。

そしてその柄を軸にして両脚を振り上げ、曲芸のようにマザーの頭上へと踏み上がった。

「グルアアアッ！」

耳障りな声を上げながら暴れるマザーの頭上で、Ｊが両手を高々と上げる――

その上に大きく広がった立体魔方陣が、無数の模様を空中に躍ら

せた。

転機

「無事？ セーコちゃん」

「あ、はい。アデリアさん達もご無事で」

倒されたマザーを見ながら、そう応じてミラーシェイドを外す。それから見た世界はやっぱり綺麗な青い海を臨む湾岸の町で、そこらじゅうに散らばるクリーチャーの死体が不似合いなほどに美しかった。

「いや、一部残骸まみれになってますけど。」

「相変わらず良く壊しますねー。」

「その方が目立つからじゃない？ ナイダスを消せるのは」しかないんだし」

しょうがないわよと言うアデリアさんの言葉通り、できてしまったナイダスを塞げるのはゲシュペンストだけだそうだ。

その証拠に、「」が振り下ろした魔方陣が、クリーチャーの死体の上に絡み付いている。

やがて、ズズ…と鈍い音を立てて魔方陣が地にしみ込み、クリーチャーだった肉片の形が変わって行った。

どのみち原型留めていないんで、具体的にどう変わったとも言えなかったけれど。

「せいこ！」

「ライサ」

ふわっと飛び込んで来たライサを受け止め、ぽんぽんと背中をなでてやる。

その、羽のように軽く思える体重は、本当にお人形さんのようだった。

さっきまでの破壊兵器らしさは、もうどこにも残っていない。

桃色の澄んだ瞳が、愛らしい顔に表情を添えているだけだ。

「せいこ、ライサがんばったあ？」

「うんうん、偉いね。ライサ」

と、やわらかな金髪を撫でてあげながら、とにかくライサを褒めまくる。

その手の下で、えへへ、と恥ずかしそうに笑うライサが本当にかわいくて、一人っ子だったアタシはまた、その様子に胸をときめかせた。

うわー、やっぱり可愛いつ！

よし、妹ゲット。

そんな事をしているうちに、いつの間にか帰って来てたんだろう。気付けば、」がアデリアさんと話し込んだ。

「……」

あれ？

「……」

あれれ？

珍しく」が真面目な顔してる？

そんな違和感に、ライサを抱えたまま近付いて行くアタシ。それに先に気付いてくれたのは、アデリアさんの方だった。

「何かありました？」

「そうね……」

と、そこまで話しかけたアデリアさんがチラリと」を見る。その秘密めいたやり取りに、ふと、胸の中がもやっとした。

「あ、アタシに言えない事だったら、いいですよ言わなくても！」

ここで「聞かせて下さい！」と言えない自分にウンザリしながらも、あわててアタシは両手を振る。

だってアタシはこの世界にしたら珍入者で、」みたいに生まれながらにしてゲルナームについて知ってるわけでもない。

なのに……深く突っ込んで聞けるワケないじゃない。

そんなこんなで黙ってしまったアタシに、何を思ったか」がフオローを入れてくれた。

「アデリア」

「なに？」

「何か、セーコが腹減らしてるようなんだが
ぷちん。」

「それで落ち込んでるんじゃない！ このバカ！ おバカっ！」

バカバカバカ！と吠えるアタシに、「目を丸くする。

あ、本気でわかってないって顔してやんの。この野郎。

「…ああ、もうっ！」

いかんいかん、これじゃ」のデリカシーがなさすぎる。アタシの理想にこんな欠点はねえぞ。

やはりここは改めてアタシの理想を教え直すべきか！なんて真剣に考えていたら、今度は本当に答えをくれた。

「まあ、メシは後で食いに行くとして。さっきのマザーはF1だ」
…グランプリ？

何のこっちゃと首を傾げるアタシに、アデリアさんが説明をくれる。

「第一世代。つまり別のマザーの子供みたいなものね。本体がまた別にあるって事」

あ、そう言う事ですね。理解理解。

そう納得して」を見上げると「こんな事もわからんのか」みたいな顔してた。

ぬあああ、いちいち腹の立つっ！

「」

「何だ」

「今度、女心に関するマガジンも読んだ方がいいと思うよ」

マジで。そう言いながらライサを降ろし、「」に指をつきつけて顎をしゃくる。

その途端、アデリアさんがふと何かを差し出してきた。

小さなバッジ…みたいな金属塊。

広げられた翼のトライバル模様が彫り込まれたそれは、エンブレムに見えなくもない。

「何ですか、これ？」

「マザーから出て来たの。ミーディウムを養成する学院のものよ。私が卒業した場所なんだけど……」

と、そこまで言って黙ったアデリアさんに、思わずバッジを握り締めて続きを待つ。

そんなアタシに、アデリアさんがクスリと妖艶に笑った。

「セーコちゃん、一つ頼み事して良いかしら？」

「あ、はい」

「私、あの学院で顔が知られちゃってるから、セーコちゃんに行つて欲しいのよね」

「はい」

ただのお使いでしたら喜んで。

「スパイとして行つて欲しいの」

「はい？」

声が裏返った。

ちよ、ちよつと待つて。

ただでさえ友人作るの苦手なアタシに、いわゆる諜報活動をやれと？

スパイってあれでしょ、人から情報聞き出したりする奴でしょ。

ムリムリムリ絶対ムリっ！ と繰り返し、アタシはあわてて身を乗り出した。

「あの、アタシ自信ないです。ここの技術にも不慣れだし、何かあつても切り抜けられる自信ないし。その、ここの常識だつて知らないし勉強もしてないんで――」

「大丈夫よ、ちゃんとフォローはつけるから。ね？」

……。

……。

アタシとアデリアさん、そしてライサの視線が「」に向く。

途端、「」がふつと小さく溜息をついた。

ええ、ばつちり目撃しましたよ。

同時に肩まですくめてくれちゃったのを！

「ちよつと」！ 何その『しょうがねえな』みたいなリアクション」

「そう見えたか？」

「見えたよ！」

「じゃあ、それで正解だ」

こんの天邪鬼……っ。

「アンタがアタシの理想形だなんて、絶対何かの間違いだと思う……」
アタシは認めんぞ、認めるもんか認めませんよ。

なんて内心でギリギリ歯噛みするアタシをよそに、数日後にはちやっかり入学の手続きが済ませられていた。

予習

「ん、よし」

一仕事終わって帰った後、アタシはここに来て初めて料理をした。帰り際に入学話を聞いて仰天したけれど、手続き済んじゃったものは仕方ない。

ちなみに調理はモチロン、アデリアさんに聞きながらだ。

前世で包丁も持たせてくれなかったせいで、手付きは幾分ぎこちなかったけれど、それなりに頑張った…と思う。

「セーコちゃん、終わった？」

「あ、はい」

作ったのは、簡単なスープとミートパイ。

味の調え方を教わりながら、初めて作る料理は思いのほか楽しかった。

アデリアさんとアタシが作った物の差は…まあ、考えないようにしよう。

とりあえず形になったので良しとする。

「J、ライサ？ 出来たわよ」

「ああ」

「はあい」

アデリアさんの呼び声に応じて、それぞれ自分の席に着く面々。アタシの隣にアデリアさん、真向かいにJ、そして斜め向かいにライサ。

そんな圧倒的に女率の高いここで、やっぱりJだけが浮いていた。「これ、料理か？」

席につくや否やアタシの料理を指して尋ねるJ。
失礼な。

反射的にむすくれたアタシの代わり、Jに答えてくれたのはアデリアさん。

「セーコちゃんが頑張ったのよ。本当よ」

ああ、穏やかな声が耳に優しい。

アデリアさんいい人だ、と感激しながら自分の作った方を口に含み――

「……う」

自分で言うのも何だが固まった。

うん、まあ食べられる味だ。

破壊的に不味くはない。

けど、明らかに一味どころか十味ぐらい足りない気がする！

アデリアさんの料理で舌が肥えすぎたのに加え、アタシの料理の下手さが微妙な加減にフュージョンして、何というかとても残念な一口目だった。

「せいこっ」

「……うん？」

「おいしーよ？ これ」

頬張ったパイをむくむく噛み締めながら、そう言ってくれたのはライサ。

ああ、何ていい子！

アタシはアタシの女神だ！と拳を握り締めていたら、隣で同じように料理を口にした」がぼつりと呟いた。

「……旨い」

――はい？

「でしょ？」

「ああ」

「え、……え？」

アデリアさんと」の間でさくさくと取り交わされた会話に、アタシの方が目を丸くする。

何だそれは社交辞令か。

新手の嫌味か。

そう怪訝な目を向けていたら、アデリアさんがそつと耳元で囁い

てくれた。

「大丈夫、」は嘘言ってるわよ」
味音痴!？」

さてはアタシの望み方が悪かったのか!と悶々とするアタシの目の前で、皿を空にして行く」。

いや、嬉しいんだけど間違っても味覚音痴レベル上げないでね、と内心本気で心配してしまった。

だってどこか美味しい物食べに行った時、その喜びが伝わらなかつたら嫌じゃない。

「これ、微妙な味ですよ」

「そうね。でも、」はゲシュペンストだから」

その一言で説明を片付けてしまうアデリアさん。

すみません——ワケがわかりません。

食事が終わった後、」はどこかに出かけて行った。

ライサは部屋でビーズ編み。

アデリアさんはリビングでティータイム。

そしてアタシは自室、もといアデリアさんにもらった部屋に入り、ばたん、と後ろ手に扉を閉じた。

まず、覚えた事を整理しておこう。

そう思ったからだ。

「…変なの」

今まで怒鳴りつけて来る奴ばかりで、こんな空間はどこにもなかった。

怒鳴らない奴は遠巻きに、気持ち悪いぐらい優しさを強調して来てた。

あなたのためとか言って、単に自分が上に立ちたいだけじゃない

か。

どうせ大人なんてそんなもんだ、とアタシも斜に構えていた。

「死んでも良かったんだけど…なあ」

何でだろう、今ではそんな気がしない。

これが夢なら醒めて欲しくないし、もうしばらく、この流れに身を任せていてもいい気がする。

なんて、色々とまとまらない頭で考えてみたけれど、はつきりした答えなんて出るわけではない。

だからアタシはベッドに仰向けに寝転がって、枕元の本を手にとった。

——青い背表紙の本。

この世界では青を最下位として、虹の色を辿って赤が一番上のランクになるのと言う。

要するにアタシが手にしているのは、アタシの世界で言えば幼稚園児が手にするようなレベルの本なんだけど、アタシにはそれで充分だった。

「過去より、現在へ…」

ルームライトを背表紙に受ける本を開く。

そして何度も読み返した一節を言葉でなぞり、アタシは最終確認へと入った。

「ゲシュペンスト。ナイダスを消せる者。ファウンテンヘッドが精神活動している時だけ行動できる」

身近なゲシュペンストは「だ。」

実際に仕事でナイダスを消す所は何度も見ているし、これに関しては聞かれても間違えないで済む気がする。

次。

「ファウンテンヘッド。異世界から時折、ゲルナームに訪れる者。ゲシュペンスト発生の引き金」

これがアタシ。

略称でヘッドと呼ばれる事もあるらしいってのは、アデリアさん

から聞いた話だ。

そこまで読んでページをめくる。

「ミーディウム。発生したゲシュペンストを探知し、固定する技術を持つ者」

これがアデリアさん。

そして、これからアタシが行くのが、そのミーディウムを育てる場所って事。

「……」

そこから後ろのページは、世界の状況についてだった。

「ゲルナム。正しく歪んだ世界。崩壊予定、あるいは崩壊した各文明の特徴保存を目的としたコロニーを持つ。生活空間はこのコロニーを利用して行うのが一般的」

……。

これは、アタシのいた文明が将来的に滅びるって事なんだろうか。まあ、滅びかねないぐらい危なっかしい文明だったのは認めますけどね。

とりあえず、ゲルナムにはコロニーがいくつかある事、それらの文明の大半が異世界のものをモデルとしている事。

時々そこにナイダスができ、それができたら逃げなきゃならん事。さらに、それを消せるのがゲシュペンストだけである事。

以上の事と、アタシ「ファウンテンヘッド&J」ゲシュペンストの関係が理解できてれば、世界の認識としては及第点らしい。

「ん、よし」

青い本を床に放り投げ、もそりと寝返りを打って枕に突っ伏す。

これだけ覚えておけば、学校で「昼ってどうして明るいんですか」レベルの阿呆な質問するような真似はしないだろう。

結構バカでもないじゃんアタシと思う反面、まだアタシの中で「行きたく無い病」がぐるぐると渦巻いている。

また冷たい目で見られたら。

また、会話から取り残されたら――

「……やめよ」

ここはアタシのいた世界じゃない、異世界だ。

前の事を考えるのなんてやめようと何度も自分に言い聞かせて、アタシは強引に目を閉じた。

記憶

ゲルナームにきてから、ずっと忘れていられた出来事。

そんなもの、今になって思い出したってしょうがないのに――

「……最低だ」

振り払おうとすればするだけ、当時の光景が蘇る。

あの日、気がついたらクラス中が静まり返ってた。

ボロボロになった教科書が、割れた窓から入り込む風に吹かれてた。

欠けたガラスを照らす光。 転げた椅子。 倒れた机。

空気は冷たく冴えていて、彩度がゼロになったような錯覚すら感じさせる。

そんな広い教室にたった三人、バカみたいに座って向き合ってた。原因は…アタシだった。

「こう言う事は、あまり言いたくないんですが――」

そう切り出す教師の声が耳に障る。

殴られた頬が痛い、口の中も苦い。

アタシ悪くない、なんて言ってもムダなのはわかってる。

いつだって、強いのはレッテルを貼る側だ。

…もういいよ。

アタシが全部悪い、そうすれば綺麗に解決するんだろ。

説明する気だって残らず失せたよ。

そんな無気力なアタシを、何度も何度も会話だけが通り過ぎて行
って――

アタシは、ここにはいられないと思った。

それから学校に行かなくなった。

時々、ジュンだけが遊びに来てくれた。

みんな壊れ物を扱うみたいにあたしを扱ったから、ジュンが来る事にも文句は言われなかった。

たまに身内が泣いたり怒ったりしたけれど、その中にあたしの欲しい答えはなくて。

そのまま一ヶ月が過ぎ、半年が過ぎ、一年が過ぎて行つた。

「セイ」

あたしの部屋で、メイク直しながらジュンが口を尖らせる。

「もったいないなあ、セイ。かわいいのに飾らないんだもん」

「いらねーよ、そんな評価……」

ジュンを振り返りもせず、溜息混じりにそう返す。

かわいいとか大きなお世話だよ。

そんな風に答えていたら、ジュンが例の話を持ち出して来て――そして、あたしはゲルナームに来る事になった。

「……」

暗い気分で目を開く。

とつぷりと暮れた窓の外、見えるのは広々とした夜景、と――

……コンコン？

「ひっ……!？」

途端に見えたものに息を飲んで、あたしは思わずベッドから飛び起きた。

「アデリアさあん！」

部屋から廊下に飛び出し、リビングに飛び込んでアデリアさんを呼ぶ。

その声に振り返ってくれたアデリアさんに、あたしは涙目で訴えた。

「……」の奴に、扉から入れて、言って、下さいっ！」

そう。窓の外に見えたのは」だった。

来るなら廊下から来てくれと言いたい。

壁に立つ事もできる」にとっては、階段も壁も似たようなものなんだろうけど、アタシはそんな奇抜なご対面に慣れちゃいないんです。

「うるせえな」

「誰のせいだ！」

と、リビングに入って来た」に開口一番で文句を叫ぶ。

」の奴、どこかで遊んで来たんだろウ。

彼愛用のハルバード、もとい普段はブレスレットやアンクレットの形でその体を飾っている武器が、妙な感じにすすけていた。

「そこまで驚く事か？」

なんてアタシをあしらいつつ、涼しげな顔でソファに寝転ぶ」。

それを見た次の瞬間には、アタシの片手が近くのクッションを引っ掴んでた。

「フツー驚くわっ！」

無視すんなオイ！とこっちに背中向けてる」の後頭部めがけて全力投球。

途端に振り返りもせず、」がひょいと上げた片手でクッションを止めた。

かと思えば、手首のスナップだけで投げ返して来る始末。

当然のようにアタシもそれを投げ返す。

こうして」との間でさりげなくキャッチボールが成立したが、頭に血が昇ってるアタシはそれどころじゃない。

「だいたい、何の為に玄関があるのっ……！」

「構造上」

「そうじゃねえっ！」

アタシの世界の住民は、窓から様子を見に来たりしません！

その事を、ひたすら」に訴えて、説明して。

やがて色々と疲れたアタシがふて寝するまで、それほど時間は要らなかった。

「あの、バカ」

知らん。もう知らん。

あそこまでデリカシーない奴なんて最低だ。

「アホバカタコ……クソ野郎、っ……」

電気消した部屋で枕に突っ伏し、毛布を被ってうだうだと愚痴る。
だいたい、アタシを知らない人が多すぎるんだ。

いや……知られてないから気楽なのか。

過去なんて切り離せない、でも元凶から離れる事はできる。

こっち来て良かった……かな。

でも、あれはない……よ、ね……

ぼやく端から、次々とバラけて行く現実感。

眠気が、徐々にアタシの思考を麻痺させて行つて――

「……」

ふ……と。

不意に、遠くから誰かの聞こえた気がした。

高低二つ。

男と女。

「あんまり怒らせちゃダメよ」

そんな、たしなめるような女の声。

夢現の境、誰のものかもわからないけれど――

「……本当に嫌われちゃうわよ？」

そう諷める声に、男の声が重なった。

「俺を誰だと思ってるんだ」

不遜にて傲慢、身勝手を地で行くような声音。

ふざけんなよ、と言おうとしたけれども声が出ない。

ああ、そうか。

……眠いんだ、アタシ。

「知ったツラで同情したって落ち込むだけだろ。それなら怒らせた方が、まだ…」

そこから声が遠くなる。

…聞こえる言葉が曖昧になる。

「……、だろ？」

「…呆れるわ、貴方らしくて」

「くく、言ってる」

上等だ、と。

最後に聞こえた男の声は、何かに挑みかかるような実に頼もしい声だった。

転入

…でけえ。

学院ウィグリド入口——もといアタシを見下ろす門を前に、思わずそんな感想が漏れる。

そこはまさに城門だった。

むしろ、校舎がそのまんま城にしか見えなかった。さすが異世界。重々しい金属製の装飾門の左右に、どっしりと伏せている石の獅子像。

同じく石組みされた壁には鳶が這い、建物の歳月を感じさせてくれる。

安っぽい城のアトラクションなら行った事があるけれど、この建物から感じる威圧感はそのなのとは違う——

まさにバケモノと関わる連中を育てる場所なんだと、はつきりわかる雰囲気だった。

門を潜って大きなエントランスに入れば、その突き当りが理事長室。

教室に行くには、その左右壁際にある階段を上がって二階に行き、通路を歩いて行けばいいんだと、「がアデリアさんのメモ片手に説明してくれてた。

…多分。

「大丈夫か？ セーコ」

「ぜ、全然大丈夫だと思う…」

もう、自分でも何言ってるかわかりませんけどね！

あああ帰りたい、と早くも気持ちちが全力で後ろ向き。レベル1で魔王城に辿りついちゃった勇者の気分だ。

「なら、前見て歩こうぜ」

「見てるって！」

ちよつと視線さまよってますけど！

「J、アンタの図太さが恨めしいよ…」

「そりゃ、お前の願望だったからな」

なんてさらっと言ってくれたJに、やっぱり願う方向間違えたと思う。

そんなこんなで場に圧倒され、行き交う生徒の好奇の視線にさらされつつ、アタシは理事長室へと足を踏み入れた。

入ってまず目に付くのが、大きな窓と、それを背にして置かれた机。ダークブラウンの重厚な机は綺麗に磨き抜かれ、そこに置かれた小物すらくつきりと映している。

少し視線をずらせば、窓横に束ねられた赤いカーテンが、天上付近で緩くドレープの弧を描いていた。

それを見上げるアタシの、制服の左胸で光っているのはバッジもといエンブレム。

青——最下級を示す位の色だ。

まあ、当然なんだけど。

「J、コレ何？」

「全体図だろ」

理事長室内、角にちょこんと置かれたオブジェ。

それによれば、この城のような校舎を中心として、四つの棟があるようだった。

1・思い切りメタリックな外見の棟、REGULUS。獅子棟。
主に銃機や機械の研究・製造に関わる場所。

2・いくつもの歯車が噛み合った棟、VOLUTE。螺旋棟。
俗に言う錬金術に関係する場所。

3・ぱっと見た感じ巨大な樹にも見える棟、SERPENT。竜蛇棟。

アタシの世界で言う所の幻獣とか生物に関わる場所。

4・なぜか半透明で描かれている棟、IRIS。霊素棟。

これだけ、ある者にとってはあり、無い者にとっては無いって言う妙な説明がついていた。

「三角錐…？」

位置関係としては、本校を中心とした三角形の頂点に獅子・螺旋・竜蛇が置かれ、霊素が本校と重なるように上下に伸びている。

と言うか、うつすらと霞んだ霊素棟は見ようによつては上あるようにも、下にあるようにも見える不思議なものだった。オブジェなのに。

「待たせたね」

「はいっ！」

と聞こえた声に急いで振り返り、慌てて頭を下げる。

そこに、いつの間に来たのか理事長さんがいた。

漆黒のインバネス・コートに黒ズボンと白シャツ。ちよつと髭を生やした栗色目のオッサンだ。

オールバックの白髪がまた、服にやたらと良く似合う。彼が首から下げているのがエンブレムでなく十字架だったら、どこかの神父さんかと思うただろう。姿勢も良いし、細身だし。

——や、アタシの世界の神父さんは、腰に剣と銃なんて装備してませんけど。

「今日、転入手続きをする晴子と言うのは君かね？」

「あ、はい。アタシはアデリアさんの推薦で——」

そう言った瞬間、空気が凍った。

何だ、このピシッと引き締まりました的な雰囲気は。

「…あの」

何か変な事言いましたかアタシ。

と、おそろおそろオッサンもとい理事長さんの顔色を伺うと、急に理事長さんの声が裏返った。

「あ、ああアデリア猊下！？」

…へ？

今何か、すごい敬称を聞きましたが。

「すいません、もう一度」

ワンモアプリーズ？

「^{カーディナル}枢機卿。アデリア猊下のご推薦ですよね!？」

「…あ、はい」

勢い込む理事長さんのテンションに、圧倒されて生返事になるアタシ。

だって何かめっちゃ感動されてるんですけど、どうすりゃいいんでしょうかこの状況。

むしろ理事長さん、顔近い近い。

と、今までの緊張が一気に消し飛んだ分、やたら落ち着いてしまった気分を味わいつつ、アタシはひたすら感動する理事長さんをながめてた。

「セーコ、アデリアから何も聞いてないのか？」

そう怪訝そうに尋ねて来る」をくるりと振り返って、うん、とうなずいてみせる。

「聞いてねえ」

確かに、素性も知らん奴の転入をゴリ押しできちゃうんだから、それなりにコネはあるんだろーなぐらいには思ってたけど。

でも今は、そんな事よりアデリアさんから預かった転入届を渡す方が先だった。

「つまり、転入OKって事ですか？」

「ええ、猊下のご推薦とあれば断る理由もございません!」

なんて、ラブレターもらっちゃった男の子みたいに転入届を読みふける理事長さんに、ほっと内心で息をつく。

とりあえず受理はしてもらえるみたいですね。

うん、良かった良かった。

「時に猊下はお元気でしうか、私が候補生であった頃はそれはそれは皆のあこがれでして——」

そこから先は、理事長さんのあまりの熱弁ぶりのせいか良く覚えていない。

ただ、アデリアさんがここで物凄い尊敬されてたマドンナ的存在だった事、ある日突然姿を消した事なんかが断片的に判ったのみ。

そんな話よりも、アタシは重大な事を発見してしまった。
なにしろ、理事長さんはどう見てもいい年こいたオッサン。
その理事長さんが「若い頃」に憧れたって事は――
「マジですか」

アデリアさん、あなた一体何歳なんですか。

ツァーラ

理事長室で気が抜けたおかげで、校内を歩くアタシの足取りは軽かった。

エントランスの階段を昇り、扉を消して廊下に入る。
そう、開くんじゃなくて消えるんですよ扉。

——理事長室以外は。
扉にも広げられた両翼を模したエンブレムが扉にあって、開けようと思うと勝手に消える。

最初、知らずに押し開けようとしたアタシはバカだった。
こう、見慣れない物にそつと前足を出しかけた猫みたいな姿勢で固まりましたとも！

…恥ずかしい。

「……わあ」

それでも口を開けば、わあ、だの、おお、だのありふれた反応ばかりがこぼれ出す。

それぐらい、アタシは思い切り異邦人してた。
アタシを置いてさつさと帰ったJへの文句も、この光景の前では消えてしまう。

床に敷かれているのは刺繍入りのラグ。柱は所々に彫刻をほどこされた艶消し仕様。

そして壁際では、生徒が何人も談笑している。

服にある程度バリエーションがあると、これが校風なんだろう。

いわゆる制服を着ている生徒もいれば、私服にエンブレムと言う生徒もいた。

…ほとんどが青だったけど。

「あなた、転入生？」

「は、はいっ！」

ビビった！

反射的に振り返ったアタシの目についた人。

それは、どこか冷たい雰囲気を持つグリーンカラーの女生徒だった。

ロングの黒髪に暗い灰色の瞳、気の強さを感じさせる態度と口調。そして燦然と階級を主張しているエンブレムが目にもまぶしい。

風紀委員とかやってそうなタイプだよなあ、と咄嗟に思う。

視線を反らすべく見る先を下に落とすと、すらりとした脚線美が、制服のプリーツスカートに映えていた。

「この時期に珍しいわね。案内書は読んだ？」

「…いえ、まだ」

」の説明もすっぱぬけるぐらい緊張してましたので！と内心で毒づく。

嫌だなあ、来て早々トラブルにならないといいんだけど。

そんな思いをそつと噛み締めて、アタシは彼女と向き合った。

「今日が初日？」

そう遠慮なくたずねて来るグリーンカラーの彼女が、ちらりとアタシのエンブレムを見る。

はい、見ての通り最弱生徒です。

思わず逃げ出したくなる気持ちをぐつと堪えて、無言でこくりとうなずいてみせる。

だいたい、アタシ何かやらかしたっけ、と色々考えてはみるものの、扉の前で片手上げたまま硬直してたり、同じ場所で三回ぐらい道に迷ったり、」への文句を一人で呟いてたりした事しか思い至らない。

うん…怪しまれて当然でした。アタシ何て不審人物。

まずいな、詮索されそうになったら全力で逃げよう。

そう決意を固めていると、彼女が不意に口を開いた。

「案内するわ。後、聞きたい事あったら聞いて頂戴」

「うわー、なんか一方的。」

その態度に内心ムカツキつつも、やっぱり彼女の持つ武器に目が行くアタシ。

「何か？」

「いえ、別に」

撃たれたら痛いよな、やっぱり。

「みたいに穴空いても平気な体だったらなあ、と今更思っても後の祭り。」

「案内…お願いします」

変に恨みを買っても嫌だもの、好きで」に理想持ってたかたわけじゃないし。

そんな言い訳を自分の中で並べながら、アタシは彼女の案内を受ける事にした。

名乗りによると彼女はツァーラ。

カラーはオリーブ。

「グリーンじゃないんですか？」

「オリーブは俗称」

「さいですか。」

「……」

「いかん、気まずい。」

この沈黙が気まずい！

カッカツと高い足音を立てて前を歩くツァーラは、俗に言うお嬢様を連想させる。

だからアタシは、侍女にでもされた気分でその背中を追いかけていた。

「ここの先が更衣室」

「はい」

「ここが食堂」

「はい」

「ここを真つ直ぐ行くと講堂」

「はい」

「何だか、自動応答機と化してませんかアタシ。」

「後、聞きたい事ある？」

「あの」

「ツァーラ、それ新人か？」

質問しかけたアタシの声を遮って、不意に割り込んだ声。

それを聞くや否や、アタシのテンションが下がって行った。

確かに青ですけど、思い切り馬鹿にした口調で言わないで下さいよ。

そう喉から出かかった言葉を飲み込み、声の主をジト目で睨む。

ツァーラとアタシを眺めているのは、やや黄色がかったエンブレムの生徒。

うつすらと緑が残っているところを見ると、多分、ツァーラより少し上なんだろう。

浅く日に焼けたような色の肌と、良く締まった筋肉は格闘に慣れた男特有のものだし、ベリーショートの赤い髪や、金に近い琥珀色の瞳は獣にも似る。

ちなみに、顔立ちは悪くない。

…その分、性格は悪そうだったけど。

「お前、コレにわざわざ案内してやってるの？」

そうニヤニヤ笑いながら言うそいつに、アタシが文句言うより早く、

「はい。それが何か？」

カツ、と足音高く彼に詰め寄ったツァーラが、冷たい一言を叩きつけた。

「用があるから声をかけたんですよね？ご用件は？」

「あ、いや…」

「無いのでしたら退いて下さい。案内の邪魔です」

そうピシヤリと言い放った彼女に、気圧された男子生徒が横にそ
れる。

その氣勢に内心で拍手を送っていると、ツァーラの視線がアタシ
に向いた。

「行くわよ、転入生」

「あの、晴子です」

思わず訂正したアタシに、歩き出そうとしていたツァーラの足が
止まる。

やべ、もしかして怒らせた？

そんな懸念で固まったアタシの耳に、彼女の声突き刺さった。

「晴子」

「はいっ！」

生意気言ってすみませんでした！と謝ろうとしたアタシの視野に
入ったのは、

「ほら、行くわよ」

さらりと黒髪をなびかせて振り返る、ツァーラの控えめな笑顔で
した。

中庭

ツアーは無愛想でも、悪い人じゃなさそうだった。

常に突き放すような口調で話すわりに、質問にはきちんと答えてくれる。

そんなこんなで、一通りの案内を受けたアタシが連れられて来られたのは中庭。

そう、まさに城の庭園！って感じの広々とした空間がそこにありましたよ。

「うわー」

いいセンスだ、と目を見張る。

整えられた下草の緑と調和する、彫刻つきの三段噴水。

蔓草を絡めたトレリスに寄り添う、すらりとしたスタイルのテールセット。

少し視線をずらせば、壁に据え付けられた獅子顔の石像の口から、細い滝が流れている様子までもが見て取れる。

そんな感じで見た目こそ中世しているのに、ちゃっかり自販機があつたりする辺りがこの世界らしい。

最も飾り箱的な見た目のせいで、言われなければ何だか判らなかつたと思うけど。

そこでアタシが一個買い、続けてツアーも一個買う。

そうして二つ分の精算を済ませ、アタシ達は壁際のベンチに腰掛けた。

「もう質問はない？」

「ええ、まあ」

何となくわかったのだ。

と、ジューズにストローを刺しながら頭を整理する。

まず、靈素棟の名前にもなっているIRIS、つまり空の虹は見る人によって五色に見えたり七色に見えたりする事から、定まらな

いもの、感性^{センス}の代名詞にもなっている。

そして虹の一番上は赤。

これが枢機卿のシンボルカラーであるカー^赤ディナルと言う意味と重なって、高位Ⅱ赤と言う図式になっているんだそうだ。

で、青は見習いもとい候補生。

ちなみに一括りで青と呼ばれる色は、実は紫や藍も含むと言う。
アタシの青は紫寄りだ。

何で青とその他で分けられているのかと聞いたら、緑以上になつてようやく、正式なミーディウムとしてナイダスに関われるからだと教えてくれた。

残りの質問は後で聞くとして。

「やっぱり、青が飛び抜けて下なんですネ」

「そうね、そこから上がるのが一番大変よ」

「…そっすか」

つまり青二才か…。

何だかなあ、とストロー噛みつつ肩を落とす。

そんなアタシ達の頭上から、午後にふさわしい穏やかな木漏れ日が降り注いで来ていた。

ちなみに買ったのはヨーグルト風味のフルーツジュース。

知らない果物名ばかりなのがちょっとブキミ。

「未熟の青、か…」

ツアーラは、細身だけど特に弱さを感じない。

それなりに場数も踏んでるんだろうなと、漠然と思わせるものも持っている。

なだらかなボディラインに、切れ長の涼しげなまなざし。

柔らかさを感じさせる肌色を纏う、器用そうな指先がまた女性的。

「何か？」

「…いえ、別に」

何かこう、差を感じると言つか微妙な気分なんですけどどうしまし
よう。

大して年変わらないって言ってたけど、とてもじゃないけど雰囲気が違う。

そんな一方的な劣等感を感じていると、不意に向こうの方で歓声が上がった。

原因はJだ。

アタシを迎えに来た所を、他の生徒に囲まれたらしい。

「珍しいわね、ゲシュペンストだなんて」

「わかるんですか!？」

「ええ。ミーディアムの憧れだから」

Jの方を見つつ、そう答えるツアーラの声に感動はない。

そのリアクションは、他の生徒の熱い盛り上がり比べて、妙に素っ気無いものだった。

あれ? と思った。

おつかしいなあ、Jだったら、もっとモテてもいいんだけど。

「ツアーラさん」

「ツアーラで」

「ツアーラ、もしかしてゲシュペンスト嫌い？」

最後の一滴を飲み干してそう尋ねたアタシに、ツアーラが静かな笑みを浮かべる――

…ゾツとした。

その笑みに、確かな殺意があつたから。

スクイズ

……。

……。

うふふふふ。

「……セーコ、笑い方が不気味だぞ」

「え、そう？やだなあ、気のせいじゃない？」

ふははははは。

これがニヤけずにいられますか！と悪役笑いをかますアタシの後ろを、Jが首を傾げながら付いてくる。

少し前、無言で去ってしまったツァーラにショックを受けていたら、Jがアタシを誘ったのだ。

校内遊技場——カジノっぽい息抜きの場所に。

賭け事いいの！？と仰天したもんだが、Jいわく理事公認。

そついや、アタシここで政府とかの話聞いた事がないなど、改めて思った。

ドラマらしきものはTVでやってるけど、良く考えたらニュース見てない。

コロニー別に生活してるって事は、いちおう法律ぐらいあるんだろうけど。

「……んー」

「セーコ、勝利の余韻に浸ってるのか？」

「考え事！」

難しい顔で余韻に浸るとか、どんだけ器用な奴に見えてるんだ。

と、相変わらず空気読めないJに苦笑して、アタシは夕暮れ色に染まる校舎を校門に向かった。

アタシがJと参加したのは、生徒達の間で流行っているスクイズと言うボード・ゲーム。

オセロとチェスを足して2で割ったようなゲームで、まずオセロ

のように相手の石を挟んで色をひっくり返し、その色を土地に見立てた上で自分の駒を進めると言うものだった。

その駒も色々だ。

例えば自分の色だけしか進めない兵士。

自分の色・相手の色・自分の色となっている場所しか進めない騎士。

相手の色しか進めない暗殺者。

自分色と自分色の間なら相手色が何個あっても構わない魔術師。

乗っていた色がひっくり返されて変わると、今度は変わった色の方しか進めなくなる道化師。

などなど、駒も名前に恥じない活躍をする。

まあ、何だかんだでボードゲーム系に自信があるアタシは、十人抜きと言う快拳を達成してみせたのですよ。

その連戦ぶりに、時々行われていると言う大会に、いつか出たらと言われるぐらい。

「意外だなあ、Jがゲーム弱かったなんて」

「お前が強いからだ」

なんてさらっと負けを認めてくれちゃったJの言葉に、ますます機嫌を良くするアタシ。

そりゃあダテにネット対戦で上り詰めてませんよ！と胸を張ったあたりでふと気になった。

「J、今なんて？」

「だから、セーコが強いからだ」

「……」

… ああ、そっか。

そう言う事か。

納得した。

「そっぴや、アタシの願いだもんな。」……」

アタシが、ボードゲーム弱いなんてコンプレックス持った事なかったからか。

だからJ、スクイーズ弱かったんだ。

金がある奴だけが強くなれるゲームと違って、古典的なゲームは運と技術次第でいくらでも強くなれる。

それが面白くて前の世界でハマってたんだけど、そんなどうでもいいスキルを披露できる日が来るなんて思ってもいなかった。

「…はは」

なあんだ。

結構やるじゃん、アタシ。

実際、三人抜きを達成した辺りから、アタシは注目の的だったし。そんな感じでずっとニヤけてる顔が珍しかったんだろう、Jが何度もアタシの表情をチラ見してきてた。

「ねえ、」

「何だ」

「次のマガジン、アタシが買ってあげようか」

そう笑ったアタシに、Jが少し戸惑った顔をする。

そりゃそうだ。

買ってあげよう、なんて思った自分にアタシも驚いてる。

予期せず訪れちゃった沈黙が気まずくて、何となく早足になるアタシ。

そのまま長く伸びた木々の影を何回か踏み越した辺りで、後ろのJが不意に笑った。

「…近エうちに雪でも降るのか？風邪引きそうだ」

「ミサイル降っても平気じゃん」

天変地異でも死なないクセに。

「そうだな」

「そうだよ」

Jの再生能力は普通じゃない。

以前、倒れたビルの下敷きになった時にはついに死んだかと思っただけ、数分後、メキメキとビルを力ち割って出てきやがった。

アンタは雨後のタケノコかと、あの時はちよっと押し込み直して

みたくなつたもんだ。

「いいから受け取っておきなつて。な？」

もしアタシが望んでいれば、」はここまでボロ負けしなかったはず。

そう思うと黙つてもいらなくて、思わずそんな事を口走つてた。

「一冊でいい？」

「マガジンはな」

聞けば、他にもいるものがあるんだと言う。

それにOKサインの親指を立ててみせて、アタシは小走りに校門から駆け出した。

銃砲店

「欲しいものって言うから、何かと思えば…」

武器だったのか、と今頃になって納得する。

「がアタシを連れて入ったのは、いわゆる武器屋と言うか銃砲店。妙にスマートな武器商人^{ガンスミス}が満面の笑顔でお出迎えしてくれる物騒な店だった。

…どちらのホスト様ですか？

ガンスミスは、そう聞きたくなるぐらい穏やかな印象の人だった。やや紫がかった白銀の髪、甘く穏やかな顔立ちに緑の瞳。

モノトーンのスラックスとカットシャツに、きっちり合わせたベストとネクタイがやたら理的。

「の見たまんま暴力装置です！みたいな外見と並ぶと、余計にその穏やかさが際立って見える。

そんな人がニコニコ笑いながら武器を薦めている図は、なかなかにシユールだった。

「コレ全部、売り物なんだ…」

壁にずらりと並べられた、ナイフやライフル、それからハンドガン。

さらにショーケースに陳列されている物には爆弾も。

犯罪対策大丈夫？なんてヨソ者のアタシが心配になってしまいうぐらい、右を見ても武器左を見ても武器、とにかく武器が目に入らない場所がないぐらい武器だらけだった。

どことなく青光りして見える金属質な店内は、置いてある物が物だけに肌寒く感じる。

整然と並ぶ品物の無機質さが、飾り気の無い店内に不気味なほど似合っていた。

「もうちよっと、別のモノ買いに行くと行ってたよ」

「例えば？」

「服とか」

と、ズラリと壁や棚に並んだ武器に一通り視線を流してから」を見る。

「……」

見事に上から下までゴシック系だった。

こんばんわ悪魔です、と言われても違和感ないレベルのモノトーンと銀。

「…ゴメン、買い物続けてて」

聞いたアタシが悪うございました。

普段、アデリアさんやライサが普通に対応しているから慣れてたけど、」のファッションはかなり特殊だ。

そこらの店に売ってるようなデザインでもないし、そもそも体格に合うのが少なそうに思える。

まあ、似合うのは認めよう。スタイル良いし。ワイルドだし。

でもやっぱり派手だし目立つし、何よりナルシストっぽいのが色々と痛い！

やっぱ、こう言うのは映画向きだよなあ…とか言っていたら、くるりと」が振り返った。

そして一言。

「誰の願望だったと思ってるんだ」

「……」

「……」

アタシの願望でしたね。

穴があつたら入らせてくれ。

それでも、ガンスミスと語り合う」はサマになっていた。

弾を込め、スライドを引き、手の上で無骨な金属光沢を弄ぶ。

その一連の動作にアタシの願望も捨てたモンじゃないかと自画自

賛する一方、その立場になるのはアタシだったのになんて悔しさも感じる。

なにせ、こちらなりたくてもなれなかったアタシを目の当たりにしてるわけですよ。

ゲシュペンストと言う事もあるんだろうけど、」はとにかく生徒にモテる。

さらに町を歩けば人が振り返る。

まあ、一部はその格好が気になって振り返ってるんだろう——と、思いたい。

「…何だかなあ」

強さと見た目と、ついでに不老かどうかは知らんが不死属性を備えてりゃ、そりゃ憧れにもなるだろう。

だから日々の八つ当たりの一つや二つ、許して欲しい。

むしろ許せ。

「候補生さん？」

「あ、はい」

黙って座っているアタシが気になったんだろう、ガンスミスがアタシに声をかけてきた。

案の定、ちらりとエンブレムを確認される。

」によると、カラーを感覚的に認識できるのは相当に高い感性センスの持ち主だけで、そうじゃない場合、「何か威圧感」とか「何か空気みたいな存在感」とかしか察せ無いそうだ。

だから、行き交う人々の中に飛びぬけて力のある人がいても、そうそう直ぐには判らない。

高位のミーディウムになると、相当に遠くからでも一発で気付けるらしいけど。

「色々大変だったみたいね。大丈夫？」

「…はい」

同情的なガンスミスの言葉に、素直にうなずいてみせるアタシ。アタシがヘッドだと言う事は黙っているよう、アデリアさんに念

を押されてる。

理由は簡単だ。

ヘッドを人質に、ゲシュペンストを脅迫する奴が出ないようにするため。

ゲシュペンストはナイダスと拮抗できる数少ない力だから、そのヘッドも貴重品扱い。

それならSP付きで保護すりゃいいじゃんと思うし、実際にそうなるヘッドもいるらしいけど、どこに行くにも何をするにも確認責めに遭うのは元世界でウンザリしてたので、アタシはパスさせてもらった。

「シヨックは抜けたかい？」

「はい」

アデリアさんの提案で、アタシの肩書きは孤児、しかもナイダスと化したコロニーの出身だと言う事にしてある。

ゲルナームについての知識が乏しいのは、その時のシヨックで色々忘れてしまったから。

そんなシナリオを用意してくれたアデリアさんにはマジ感謝。

付け焼き刃で住民のフリしたってボロ出るしね。

無知を憚^{はば}らなくていいってのは気楽だ。

「しかし、君も罪作りだねえジャック。こんないたいけな子を浚^はってくるなんて。無事だったかい？候補生さん」

「晴子です」

「晴子さん。大変だろうと思うけど、文句はヘッドに会うまで溜めておいてね」

と、心底悪気の無い微笑を向けられ、アタシは思わず下を向いた。すいません、そのヘッドはアタシなんです。

そうネタバラシできるワケもなく、とりあえず口を噤む。

何だこのブーメラン。

アタシの望みって、こんな恥ずかしいモノだったっけか。

「時にジャック、コルティジャーナ達からお誘いが来ているよ」

「何ですか？それ」

「高級娼婦。僕は断り続けてるんだけどね、ジャックは人気者だから」

……。

「そ、そっちの方面でモテたいと思った事は……っ！」

無くはないけど、やっぱり望む方向間違えた！

商店街

武器商人の名前はミゲル。

彼もミーディアムで、カラーとしてはサンセットに当たると言う。
そんな彼いわく、「が変態。」

「いわく、ミゲルさんが変態。」

ミゲルさん、女性に好かれそうな雰囲気なのに、武器にしか愛を感じないと言う変な人でした。

その分、腕は確からしいんだけど。

「晴子さん、生身フェチのジャックは変だよな」

「セーコに同意を求めんな」

ええ、求められても困りましたよ。

だいたい生身フェチって何だ、三次元愛が全部変態みたいじゃないか。

「そんなに武器がいいんですか？」

「そりゃあね。ほら、手入れが悪いと女も武器も機嫌を損ねるだろう？ 女は愚痴を引き摺るが、武器は宥めてやれば素直になる。全くもって天地の差だよ。タイマーの鼓動は繊細だし、剛健な中に気紛れさを秘めた銃機なんて、身勝手な乙女よりも我侭で力強い。惚れない理由なんてないじゃないか」

いや…真顔で力説されても困ります。

とりあえず、この話題どこかに放り投げられないかなー、と視線をさまよわせていたアタシを救ったのは、試し撃ちで的の切り絵をしていた」だった。

遊んでないで早く助けに来い。

器用なのは認めるが。

「いい調整だな、ミゲル」

「愛ですから」

……。

「…Ｊ、この人家に連れて来ないでね」

「大丈夫だ、ミゲルがお前に興味持つ事は無エ」

アタシが心配してんのはそっちじゃねエ！ライサだ！

そんなに自意識過剰に見えますかと視線で訴えるアタシを余所に、さつさと会計を済ませる」。

そのスルーっぷりに文句を言おうとしたアタシの目に、ふと、」
が買い上げた小さな銃が映った。

ずんぐりとしたフォルムに小さめの口径。短めの銃身も相まって、玩具のようにも見える銃。

それがコルトポケットと言う名の銃をモデルにした物である事は、随分と後になってから知った。

「そんなの使うの」

「ああ、改造しようかと」

…本当に玩具扱いか。

まあ、Ｊの楽しみと言えばクリーチャー殴りに行くかどこかに遊びに行くか、ぬくぬくとマガジン読んでるかのどれかだから、多分暇なんだろう。

余裕あるな。

「武器持つてる奴って、他にもいるよね？」

カウンターの奥で何やら最終調整をしているミゲルさんを見つつ、
Ｊへと質問を投げかける。

「Ｊ？」

「ん？ああ。ミーディアムは大抵な」

余所見中だったか。

そんなＪに口を尖らせて、アタシは小さく溜息をついた。

「アタシも一個ぐらい持とうかなあ」

「散々、俺を吹ッ飛ばしといて何言っただ」

シヨットで切り出した金属板、もとい猫のシルエット型のものを、
ぴし、とアタシに突き付ける」。

それをぺいっと手で払って、アタシはふっと息をついた。

「でも」、ダメージ受けてないじゃん」

「少しは受けてる。あの程度じゃ死なんが、ダメージ蓄積すりゃ動けなくもなるさ」

「どれくらい？」

「……」

アンタが悩んでどうする。

「でも、何か持っていないと落ち着かないなあ。街中で急に撃たれるとか嫌だし」

「無い。使えるのはミーディアムや俺達だけだ。他の連中じゃ調整すらできん」

聞けば、売り物の銃は基本的にそのままだと暴発する状態なのだと言う。

それを所持者が術的に書き換えて、ようやくまともに作動する仕組みらしい。

その”書き換え方”は学院でしか学べず、結果として何かあったらミーディアムかその関係者だと判るんだとか。

アタシも書き換えたいなあ、と羨ましがったら」が意地悪く笑った。

「上に行くには、精神力要るぞ」
パスです。

ただでさえ後ろ向きな人生、いまさら前を向く気なんてございません。

そんな調子で買い物を済ませ、ようやく繁華街に繰り出した頃には、街がすっかり夜になっていた。

「うわ」

人、多っ！

商店街のメインストリートに出た途端、真っ先にそう思った。

身動き取れないほど多くはない。けど、そこから輝くイルミネーションライトが目眩しい。

高々とそびえるビル、呼び込みの声で華やぐ店頭。

色とりどりの品を並べたショーケースの中には、それらを引き立てるような装飾が施されている。

ゲルナームの第五街区——アタシやアデリアさんが住んでいる場所をそう呼ぶらしいが——その中でも、ここは中規模にあたる商店街なんだと言う。

一応、自分のいた文明がモデルなのに、まるで別世界を見ている感覚だった。

家から出なくなって長いアタシにとっては、元々別世界だったけど。

「」

「ん？」

「武器が要る世界なのに、みんな結構楽しそうだな」
アタシの印象だと、もっとうとう……陰鬱な、世紀末的な顔して生きている人が多くてもいい気がしたのに。

なのに、みんなわりと普通に日常を楽しんでる。

信号待ちしたり、露店で買い物したり、笑い合ったり——

あ、あそこのクレープ美味しそうとか、甘い匂いに誘われるアタシも危機感皆無だったけど。

「怖くねえのかな」

「戦う相手が相手だからな」

「ナイダス？」

天災と等しく訪れる死の象徴。

その名前を口にする、」が軽くうなずいた。

「勝手に発生する病気相手に、普段から怯えまくって生活してる奴なんていねエだろ」

まあ、確かに……。

明日風邪引いてそれこじらせて死ぬかも！とか、明日寒くなるか

らそれで風邪引いて以下略とか思いながら生活するって想像つかない。

「だ、だけどさ。そう言うレベルの問題じゃないじゃん、地域一個なくなるんだよ?」

「地域一個無くなっても、避難した奴は別の場所で生活するだろ。

だいたい、隣の家の奴が風邪こじらせて死ぬだけで、次は自分かもなんて怯える奴いんのか」

いませんね。

「それなら、根源を探して倒すとか!」

「病の根源ってあるのか?」

…ない、ね。

野生動物から感染する病気なんてのもアタシの世界にはあったけど、だからって、野生動物を全滅させたって解決にはならない。

そうした物が悪魔の仕業だと信じられてた時代なら「魔王倒しに行くぞ!」みたいな運動もあつたかもだけど、いかんせんナンセンスだ。

「いつか罹^{かか}る病。いつか起きる不運。いつか来る天災。それに日々怯えた所で不毛なだけだ」

そう、ポケットに両手突っ込んで言う」の声はさばけてた。

その背中を追うアタシの足が重くなる。止まる。

アーケードを流れる明るいBGMが、こう言う時はそらぞらしく

聞こえる――

「…そうだね」

確かに、アタシは人の病死を時に他人事だと思う。

でも、それとこれとは、何かが違うような気がしてた。

再会

アタシの世界はすごく狭い。

でも、物知り顔で世界を語っている大人だって、きっと全てをわかつちやいないだろう。

確信はないけど、そう思ってた。

…そう、思いたかったのかも知れない。

「」

「ん？」

「」は、どこまでアタシの事知ってるんだ？」

「お前が、俺の元を考え始めた頃からだな」

そうになると、人生リセットしたいと思い始めた辺りか。

「……」

ちらりと」を見上げる。

と、笑顔の」と目が合った。

思わず視線を反らす。

それから戻す。

やっぱり、そこにあるのは」の優しげな笑顔――

「……」

く…黒歴史筒抜け！？

「全部、知って…る？」

「そりゃあな」

…っ！

さらっと言ってんじゃねえ！

「忘れるっ！今すぐ忘れるおおっ！」

「無理だ」

「あっさり言うな！どっかに頭打って来い！」

「再生するから無理だ」

無理でも忘れやがれアホンダラ！

そうまくし立てるアタシに対し、「の反応は超ナチュラル。

だからどうした的なその顔が、余計にアタシの頭に血を昇らせた。ウツフンな場面見られたところの騒ぎじゃねえぞコレ。

覗きだよ、罪だよ、ちよつとアタシ涙出て来たよ。

「そんなに恥ずかしがる事か？」

「ざけんな！アタシだって恥ずかしいもんは恥ずかしいわっ！プライバシー返せ！」

一回その頭の中身洗いなおして来い！と――

ひとしきり喚いた所で、アタシはぐったりと肩を落とした。

「……最低」

「そう生まれたんだから文句言ったって」

言います。

実に許せん、と尚も愚痴を並べて息をつく。

「だいたい、生まれつき記憶があるって方が気持ち悪くね？」

「セーコはどうだ？」

何でそこで問い返しますか。

「正真正銘、生まれてから普通に生きて来たんだから、いきなり記憶があつたら違和感あるよ」

「小せえ頃の記憶は？生まれてスグとか」

「……ない」

「怖いかな？」

「別に」

だつて一歳二歳の頃の記憶なんて、思い出そうとしても思い出せやしない。

その頃は幸せだったのかも知れないけれど、そんな宝石を掘り出す気にもなれない。

その事を控えめに告げると、「が小さく声を立てて笑った。

「それと同じだ」

物心ついた時から時間が連続していて、それが自分だと言つ認識があつて、それ以上でもそれ以下でもない。

「さりとてそう切り返す」は、アタシよりずっと大人びて見えた。

「いるか？他の説明」

「いる。けどその前にクレープ買って来る」

ちよつと前まで武装民だらけだと思っていた雑踏も、安心してしまえば普通の人の群れに過ぎない。

だから」を残し、アタシは急ぎ足に、甘い匂いを振りまく魅惑の源へと駆け寄った。

ワゴンの側面が開き、それが屋根になる形式の販売車。

その屋根にかけられたひさしの中に、セール中の丸文字が踊っている。

客と向かい会うようにして設置されたクレープ台の横で、新鮮な色を見せる果物はそのままでも魅力的。

そんな誘惑満載の店に並んだ十人ほどの客の最後尾につき、ポツポツな音楽を聞きながらアタシは財布を取り出した。

アタシの小遣いは、主に」達と一緒にいくナイダス破壊の報酬から出ている。

あれだけの労力をかけるんだから一生遊んで暮らせる程の収入があるのかと思いきや、アデリアさんがほとんどボランティア的にかけて来るので、それほど高額では無いんだそうだ。

もったいない。

「アデリアさんぐらい頑張ってるなら、もっと褒められてもいいと思うんだけどなあ」

目立つのは苦手だと言うアデリアさんの言葉を裏付けるかのよう

に、アデリアさんの存在は近所でもほとんど知られていない。肉屋のおばちゃんとのついで話でも、スーパーの店員さんとの雑談でも、ごく自然な感じで話題から外されているような印象を受ける。

例えるなら、限りなく存在感の淡い一般人。

「何か影が薄いんだよなあ、こつ……」

いるんだけど目立たない、みたいな。

でも良く考えたら、ある意味アタシも学校にとってそんな状態だったと思ひ出す。

いかん、暗くなるから忘れよう。

「何にしようかな」

幸いにして、今のアタシはプチセレブだ。

金持ちだ。

甘味ハシゴだってどんと来い！の勢いで残金を確かめっていると、不意に聞き覚えのある声が耳に届いた。

「晴子？」

「ツアーラ……」

夕方、あんな別れ方をしたせいだろう。

反射的に声が硬くなる。

「ツアーラ、あのさ」

「おごるわ」

へ？

「おごるわよ。何がいい？」

「……はあ」

その時のアタシは、ものすごい間抜け顔だったと思う。

そんなアタシをまじまじと見てから、ふいとツアーラが視線を落とした。

「……悪かったと思ってるの」

「あ、はい」

「敬語抜きでね」

「うん」

ごめん、と謝ってツアーラを見る。

無表情で店のメニューを見上げる彼女の横顔が、その時、思いの他寂しそうに見えた。

「選んで、晴子」

「じゃあ、苺クリーム」

「苺クリーム二つ」

あれ、同じのいいんだ。

そう思いつつ、店員がクレープを焼くのを見ながら並んで待つ。
くるくると平たく伸ばされる生地が何気に楽しい。

買い食いなんて久しぶりだと胸を躍らせていたら、ぽつりとツァーラが小声で囁いた。

「…私も同じよ。孤児なの」

「……」

「少し、話さない？」

「うん……」

そう答えて、ふとJのいた辺りを振り返る。

けれど、店に並ぶ人の列が邪魔で、ここからは姿が見えなかった。

「いいよ、話そう」

いつもアタシを困らせてるJだもの、たまには困らせたって許されるよね。

なんて、少し浮かんだ罪悪感を飲み込んで、アタシはJのいる方とは別方面に歩き出した。

再会（後書き）

今年一年、読みに来て下さった方、本当にありがとうございました
っ（．．．）

来年度も、宜しければお付き合い願います。

世界説明・移送

後で」に聞こうと思っていた事を、アタシはツアーラから聞く事が出来た。

ナイダスが来た時にどうするのかとか、どうやって逃がすのかとか。

だって街中にバケモノが跳梁跋扈した経験があつて、あんなに平常心とかありえない。

そうアタシが主張すると、ツアーラが悲しそうに笑った。

「本当に、全部忘れてしまったのね」

「ごめん」

「謝る事じゃないわよ、忘れた方が幸せな事もあるわ」

そう話すツアーラの声は、アタシをなぐさめようとする響き。

この調子だと、本気で孤児だと信じられてるんだろつ。

理事長さんも一芝居うつてくれたに違いない。

「ごめん。でも、教えて」

まだ、ツアーラに真実を告げる勇氣はないけれど。

それでも、いつか本当の事を言ってもいいかな…と、この時アタシは思い始めていた。

「ナイダスはね、普通の人とは無縁なのよ」

「え？」

「…そうね、どう説明したらいいかしら」

——ツアーラの説明をまとめると、次のようになる。

そもそも、ナイダスにミーディウム以外が入る事自体が自殺行為毒の中に、無防備なまま残るのと等しい愚行にしかないらしい。

万が一無抵抗のままナイダスに触れてしまった者は、それに影響

されて——感染して——しまう。

だから、決してナイダスに関わらせる事なく、逃がさなければならぬそうだ。

肉体ではなく、アストラル体と言うものを。

そんなわけで住民が同じ環境で生活できるよう、サブユニットと呼ばれるコピーコロニーが大量にあつて、ナイダスが出来た場合は揃つてそつちに移動させるのが通例なんだと言う。

住民に特定のエネルギー波を当て、サブユニットに向けて住民のアストラル体を「弾き出す」。

この時、ナイダスの影響を強く受けている個体だと弾かれたアストラル体がやや低い角度で飛ぶので、全反射を起こしてサブユニットに入り込めず、元のコロニーに残されるんだそうだ。

で、無事に跳んだアストラル体は、サブユニットで同じ場所にセツトされた肉体の中身に収まるんだとか。

うん。

「ゴメン、全然わかんなかった」

「感染してると重いから目的地まで跳ばない、とでも例えれば良いかしら？」

「あ、それなら何となくわかるな」

本来の意味とは少し違うんだろうけど、イメージとして納得はできる。

「教え方上手だなあ、ツアーラ」

「……そう言われたの、初めてよ」

照れと言うか困惑と言うか、そんな顔でアタシを見るツアーラ。

その反応に、実は案外素直だったりする？と内心ニヤニヤしつつ、アタシはもう一つ質問を重ねた。

「飛ばされる時に違和感はあるの？」

「あんまり無いわ。例えば私達が電波の中においても、電波が前から来るとか後ろから来てるなんて判らないでしょう？」

「うん」

「それと同じね」

「ふうん」

痛みなし違和感なし労力なし、と三拍子か。

何てラクな移動方法なんだと、思わず感心してしまった。

「いや、やる方はラクじゃないみたいだけど。」

ともあれ、その手順を踏まなかった者はナイダスに残され、移送された人々の記憶からも失せてしまう、と。

そこまで説明をもらって、アタシはちらりと時計に目を向けた。

黒い時計の長針が、真っ直ぐ下を向いている。

「の奴…困ってるかな。」

ふと、そんな事が心配になったけど、アタシは探究心でそれを抑えつけた。

「ミスとかないの？」

「全くないわけじゃないわ、常に多少のエラーは出る。記憶の齟齬そごが良い例ね」

「例えば？」

「誰かの記憶を間違って預かってしまったり、覚えているべき物事を忘れたりするのよ」

人工ド忘れ現象か。

「いずれ、手順を踏まずとも移送が可能な所まで発達したら、単なる偶然として片付けられてしまうのでしょうか。今はまだ、それに対する苦情も多いわ」

要するに、明日どこに行かなきゃいけなかったのに、忘れちゃった責任を負え等々。

命に比べれば安いもんだとアタシは思うが、そう笑い飛ばせない職種の方々もいるらしい。

「ナイダスに影響された人が、ミスって移送されちゃう事は？」

「少しあるわよ」

「マジで!？」

「ふふ、大丈夫よ」

慌てて公園を見渡したアタシの様子がおかしかったんだろう。

ツァーラが珍しく、声を立てて笑った。

「少しだけよ。それを探し出し、捕獲・始末するのもミーディアムの仕事。大丈夫よ、そのまま放置するなんて事はないわ」

残党狩りに関しては、特に力を入れている部分なんだとか。

なにしろ残党は感染者を増やしかねないし、時に人を襲うから。

そんな感じで行われる移送のデータが、保管される場所が界律倉庫。

学院の棟の一つ、IRISの最深部にあるデータベースなんだそう
うだ。

「そう聞くと、学院が政府みたいだな」

「政府？」

「地域を纏めて動かす組織みたいなもの」

「それは、私達の機関ぐらいね。私が知る限り」

あ、やつぱり。

ともあれ、ゲルナームで人が生まれた場合、ある程度の年齢でミーディアムを目指す人と目指さない人に二分される。

目指す人は将来の職に困らない代わり、時に危険と隣り合わせ。

目指さない人は将来の職探しに苦労する事はあっても、ナイダスの被害に遭う事は少ない……らしい。

「あのさ」

「ん？」

「ツァーラも、こう……術みたいなのって出来るの？」

「少しはね」

ゲシュペンストほどケタ違いの力は行使できずとも、小規模のものなら出来ると言う。

力のランクから言うと、カーディナルとゲシュペンストが最高峰、
そこから大きく差が開いて下位にミーディアム、さらにその下にノ
持
ーカラーがあるんだそうだ。
たこの者

ミーディアムで高位になると畏敬を込めて魔術師・魔女と呼ばれ

るようになり、そうなると一緒にの神格扱いなんだとか。

「アタシ、神様と同居しちゃってるのか。」

「アタシも、オリーブになったら何か出来るかなあ」

ぼつりとそう言っていると、ツァーラが首を横に降った。

「晴子は、候補生でいた方がいいと思う」

「何で？」

「嫌な事、思い出したくないでしょ？」

「うん、まあ……」

でもアタシの孤児話は、一から十まで偽りだよ。

そう言えもしないのに、騙している罪悪感がまた、少し胸を疼かせた。

「でも……ずっと荷物になってるのも嫌なんだ」

「その優しさが、命取りになるわ」

違う、アタシは優しくなんてない。

と、喉から出かけた言葉を飲み込んで下を向く。

「ツァーラ、何でゲシュペンスト嫌いなのです？」

「私が、孤児になった原因だから」

「……ナイダス、か。」

逃げそびれたのかな、と思っていると、ツァーラが静かに目を伏せた。

「私の両親ね、黒猫シュバルツェ・カッツだったのよ」

世界説明・機関と黒猫

黒猫
シュバルツエ・カツツと言うのはこのゲルナームにある勢力の一つ。
つ。

簡単に言つと宗教だ。

移送先が瓜二つの世界であっても、そこは思いの沁みた土地ではないと言う教義。

そんなの当たり前じゃんと思うが、これがなかなか厄介で、彼らはナイダスが出来そうな時でも動こうとしないそうだ。

それでもって教義はシンプル、祈れば救世主が助けに来ると言うもの。

基本的に移送がほぼ無意識のうちに行われるせいで、実はナイダスなんて存在しないんじゃないかと思う住民も結構な数いるワケで、そう言う連中に声をかけ、機関の言葉は偽りだ、と吹き込んで信者を増やしているらしい。

自分達が労働で作り上げた金銭が移送のエネルギー産生に使われていると何度言っても、横流しだの何だのと難癖つけて終わるんだと言う。

「潰さないの、その宗教」

「潰せないわ。祈りの幾つかは、救済願望から生まれるものだから」
例えば世を嘆き、不遇を呪い、それが巨悪の仕業であると思う事で自分自身を正当化する。

救世主を待ち望む系統は大概にしてそれだとツアー^{ゲヘナ}ラが笑った。

弾圧すればするだけ燃え上がる、決して消えない煉獄^{ゲヘナ}の火だと。

「不毛だなあ。機関以外を信じるな！って教育すりゃいいのに」

「それも出来ないわ。」

決められた事をして、決められた考えしか持たないようにされた人は新しい事を考えられない。

それじゃ、感性^{センス}を磨けないから、ミーディアムの候補生が減って

しまう」

…駄目か。

「でもさ、機関に従わないと残らず感染するんだろ？」

「ええ、基本的にはね」

「基本的？」

「ナイダスが来た時、必ず一つか二つ^{盲点}ブラインドスポットが出来るの。

そこにいる者は感染しないか、しても軽微。クリーチャーとも関係しない。

私がその一人だし…覚えていないと思うけど、晴子。貴女も」

「うん」

「私達が移送しなくても、一定数はブラインドスポットに入るから無事で済むのよ。」

ただ、最近は信者がブラインドスポットに入る確率が上がる不自然さが目立ち始めててね。

スポットを検知できるのは本来機関だけだから、内通者が卒業生の可能性もあるって噂になってるわ」

「…ああ」

つまり、元締めを捕まえる為に泳がせてる部分もあるのか。

ツァーラいわく、厄介な事にシユバルツェ・カツツには長い間「教祖」がいなかったそうだ。

あくまで、同じ宗教を信じていると言う同族意識で集まっているだけなので、黒幕がどこにいるかを察する事も出来ない。

機関を「偽りの危機を提唱する組織」と位置づけ、それと戦う姿勢を見せる事で団結する。

そのスタイルを、随分と長いあいだ取り続けているのだと言う。

「成り上がりの神を気取る愚者が出てくれた方がいいのよ。そうすれば捉えられるから」

「…それって、大先輩から犯罪者が出るって事だよね？」

「そうよ」

「何か嫌じゃない？」

「別に。私達はミーディアムである以前に、一人の人間だから」

どんな良い学校を出ていても、知識があっても、人間特有の間違いは犯す。優劣はない。

そんな事ないと思う油断こそが見落しに繋がると言う事を、決して忘れてはいけないそうだ。

「十のうち一が救われ、九が消滅すれば、生き残った一が残りの九の代弁者になる。」

戦場の爆撃の中で一人生き残った人の取った対策が、実際には全くの無意味であつても、最良の策であるように伝えられるのが良い例ね。

シュバルツェ・カツ十人のうち一人でも生き残れば、その一人にとつて自分の生存が信仰の裏づけになるのよ。

残り九の記憶は誰にもないのだから、その言葉を疑う人もいない」

「…そつか」

そう考えると、ミーディアムって、実は滅茶苦茶不遇なんじゃないかろうか。

何か報われないなあ、とぼやくと、ツァーラが小さく笑った。

「そうね。それでも私の両親は愚かだった。その両親を止められなかった私も愚か。もう、あの悪夢を繰り返したくないから、ひっぱたいてでも泣かせてでも移動させるわ」

毅然きぜんと言う彼女の言葉に迷いは無い。

そう決心するまでに色々あつたんだろうなあ、と思うと、アタシは何にも言えなかった。

いや、レッテル貼る馬鹿なんて滅ぼしておけば！と喉まで言葉が出掛かつてましたけど。

「ゲシュペンストとの関係は？」

「ゲシュペンストが現れるのは、ナイダスが増えた時。だから教義だと救世主扱いなの」

「じゃあ、助けに…」

来てたら孤児になつてないよね。

「…ごめん」

「いいのよ。私が許せないのはゲシユペンストだけだから。酷い話じゃない？犠牲が出るまで高みの見物を決め込んでおいて、いざ犠牲が増えて来ると英雄面して現れるのよ。そんな事があっても、それまでに犠牲になった人は救われない。私にしてみれば、ただの疫病神だわ」

…判らんでもない。

もしもアタシが今より10年ぐらい早く来る方法を知っていたら、ツアーラは孤児にならなくて済んだのかも知れない。

そんなの考えても仕方ないし、そこまで家族を思えるツアーラが正直羨ましいと思わなくもないけど、アタシの中には申し訳なさが残ってしまった。

「私以外のミーディラムはゲシユペンストが現れるといよいよ大戦だと、自分達の出番が来たと色めき立つけど、私は…」

うわああ、駄目だ。

アタシこう言う話ダメだ、アタシまで暗くなる！

よしここは、ヘッドとしてアタシがツアーラに謝ろう！

「あの、ツアーラ。あたし、アイツのヘッド知ってるから伝言あったら…するよ」

謝るよ、うん。

…怖いから遠まわしに。

「…伝えてくれるの？」

「うん。任せて」

「じゃあ、一言だけ」

「うん」

「殺しに行くって」

やっぱり正体バラせねえ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804y/>

ここが願いの終着点

2012年1月5日20時26分発行